
桐山花応（きりやまかのん）の科学的魔法

境康隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きりやまかのん

桐山花応の科学的魔法

【Nコード】

N5729Y

【作者名】

境康隆

【あらすじ】

きりやまかのん

桐山花応は科学の娘を自称する、科学好きで友達のない残念な高校一年生。愛称は花応。ある日登校の途中、不思議生命体を名乗るペリカンにしか見えない人語を話す野鳥——ペリカンのジョーと出会う。ジョーは十年前に世界を救った魔法少女を捜して欲しいと花応に願い出る。断る間もなく、敵に襲われる花応とジョー。花応はその非科学的な敵に、科学の力で立ち向かっていった。

一、科学の娘1

一、科学の娘

少女は悲鳴を上げた。

「キャーッ！」

全身を襲った衝撃。宙に浮く体。瞬時に明暗が入れ替わる己の視界。

その衝撃に堪らず上がった悲鳴が夜の街路をつんざく。

「く……」

すべての不利を内に押し殺し、少女は薄やみの中、街灯を頼りに身構える。

叩きつけられた民家のブロック塀が、引きはがした身体分だけ僅かにへこんでいる。まるでお尻をどけた後の座布団だ。

だが何とかそれだけで済んだ。

十年ぶりの魔法。障壁を展開するのは、辛うじて間に合ったようだ。

だが――

「……」

そう、だが少女は次の手が浮かばない。

本来なら障壁を展開するのは、敵の攻撃に対してなのだ。それが間に合わない。相手の速度についていけない。相手の攻撃に合わせることができない。

結果触手に叩きつけられ、ブロック塀と我が身の間に魔力を向けるのが精一杯だった。

少女は長くしなやかな髪を左右に振る。だが視界は戻らない。

「く……」

視界がぼやけるのは、夜目と髪のせいかと思った。しかし違うよ

うだ。たった一発の敵の攻撃に、体が悲鳴を上げているらしい。

十年前なら魔法の杖の一振りで蹴散らしていた。その程度の相手に今の少女は歯が立たない。

十年ぶりに手にした、魔法の杖。子供の頃は大きく感じた。今は少し小さく感じる。杖の大きさはもちろん変わってなどいない。おそらく内に秘めた力も変わってはいない。

そう――

「もう……魔法少女って年じゃないしね……」

そう、変わったのは少女だ。長ずるにつれて、魔法の力がその身から零れ落ちた少女だ。

新芽が種子の殻を自然と落として成長するように、少女の身からはらりと魔力は落ちてしまっている。

自分が魔法少女だったことすら、忘れかけていた少女だ。高校に入学する年になり、机に奥に隠してあった魔法の杖を、自分でも忘れかけた少女だ。

「それでも！」

それでも少女は魔法の杖を構える。

たとえ自分の力が十年前より劣っているとしても。たとえ変身すらできなくとも。たとえ勝てなくとも。

今この敵に立ち向かえるのは、この世界で少女だけだ。少女はそう覚悟する。

家を飛び出す際、とっさに着替えた高校の制服。その長い――校則通りの長さの――スカートの裾を、少女は翻す。

正面より相対する、小山のようなスライム状の敵も身構えたように少女には見えた。

「お母さんには、すぐ戻るって言っちゃってるのよね……」

少女は渾身の魔力を魔法の杖に送る。素材不明の金属と思しき柄に、先端にこれまた材質不詳の宝石と飾りがついた杖だ。

柄の金属が『キン――』と静かに鳴り、先端の宝石が『ポッ』と内から淡く光る。

少女はその切れかけのガス灯のような、淡い光に目を凝らす。

「頼りないけど……食らいなさい!」

その身より多数の触手をくねらす、スライム状の敵。十年前なら捨て駒のように扱われていた敵だ。

その敵を全力をもって倒すべく、少女は魔法の杖を振りかざして前に駆け出した。

新高校一年生——桐山花応きりやまかのんは朝の通学路で固まっていた。

やっと着慣れてきた制服の裾と、短い髪が風に揺れる。

そこには何かがいた。

「ペ……ペリカン?」

そう、ペリカンだ。

ペリカンの死体が、路上に放置されていた。

花応は自慢のつり目を大きく見開いた。少々きつく見える目じりの吊り上った鋭いまなざしだ。その視線でまじまじと路上に放置された水鳥のしたいを見つめるが、花応にはどうしていいのかわからない。

「えっと……保健所……警察……市役所……」

高校の通学途中にペリカンの死体を見つけてしまった。どうしたらいいのかなど、一介の女子高生である花応にはとっさに分からない。

花応はこの春高校に入学した。ここはわざと通学路に選んだ、大通りを一筋外れた寂しい道。人ごみが苦手なので、いつもはお気に入りの通り道だ。

だがこの道を通学路に選んだことを、今日だけは後悔した。

そう広くはない住宅路を、塞ぐようにその身を伸ばして転がっている水鳥の死体。第一発見者は、どうも花応らしい。

「ごめんなさい、だけど……」

花応は民家の塀に身を寄せる。水量が割に多い側溝の上だ。ここ

だけが雪解け水でも流れてきているのかと、錯覚を覚えそうになる水流を見せている。歩きながらも、水のながれる音がよく聞こえる。

花応は側溝の上に慎重に足を乗せた。壁ににじり寄るように背を向け、花応は血まみれのペリカンの足先を回る。

「私携帯苦手なの……保健所も、警察も、市役所も、番号だって分からないし……」

花応はそう独り言を呟くと、恐る恐るペリカンの足をまたごととする。なるべく見まいと目までつむった。

思わず鞆の中に忍ばせた、ガラスの小ビンを布越しに握りしめる。それはお守り代わりに、いつも持ち歩いているものだ。

「ペリ……」

「——ッ！ ペリ？」

不意に上がった声に、花応は思わず立ちすくむ。

「ほ、保健所の前に……動物……びよ、病院を……ペリ……」

「えっ？」

花応は驚いて目を開ける。辺りを見回すが、人の気配などない。弱々しい声が、途切れ途切れに近くで聞こえたはずのに、どこにも人影はない。

「何？ 誰？」

「こっち……ペリ……」

「えっ？」

花応は声のした方——自分の足下に視線を落とす。そこで目にしたのは、血まみれの水鳥の死体——ではなく、瀕死のペリカンのふるふると持ち上げられた首だった。

「なっ？」

「いや。どうもペリ……驚かせて申し訳ないペリ。できれば、近くの動物病院につれていってもらえると、嬉しいペリが……」

横たわっていたペリカンは、首だけでもたげて花応を見上げていた。
「なっ！ 何？」

「何と言われましても……見ての通り瀕死の重傷を追った、可哀想な不思議生命体ペリ」

「ふ？　不思議生命体！」

「そうペリ。こちらの世界のペリカンによく似てるペリが、私はこう見えて、そんじょそこの水鳥ではありませんペリ」

そう言っぺリカンは血まみれの体を起こした。乾いて黒くなりだした血が、ペリカンの全身の白い羽毛にこびりついていた。

「ペ、ペリカンにしか見えないけど……」

「語尾にペリがつくので、よく誤解されるペリ」

「誤解って……」

今や立ち上がり自分の背丈の程ある水鳥を、この少々釣り目の少女はまじまじと見る。

花応は背が高くない。背は一五〇に届かない。

ならばこの水鳥もその前後の体長だろう。

大きさといい、姿形といい、ペリカンにしか見えない。

「羽毛は？」

「白いペリ」

「くちばしは？」

「黄色いペリ」

「水かきは？」

「自慢の一品ペリ」

花応の矢継ぎ早の質問に、不思議生命体とやらは羽を広げ、くちばしを突き出し、水かきを上げて見せる。

怪我をしている割には、それは元気な仕草だった。

「えっと――」

答える度に自慢げにその部位をさらす水鳥に、花応は結論を言うてやった。

「ペリカンよ！」

一、科学の娘2

少女は自宅の机で鞆を持ち上げた。そのとたんに体中が悲鳴を上げる。

痛い――

だが声には出せない。家族に不振がられる。

昨日の晩の攻撃で、体に傷を負った。外見上の怪我は魔力で直したが、力の失った少女にはそれ以上のことができない。

「いって、きます」

努めて明るく言ったつもりだが、少し途切れ途切れだったかもしれない。玄関の僅かばかりの段差がづらい。本当なら、そう十年前なら服も痛みもあつという間になおった。

痛感させられる。もう自分には力がないのだと。

「仕留め損なっちゃったし……」

少女は昨晩の敵を思い出す。渾身の魔力で放った魔法に、身をよじって悲鳴を上げた敵。その場は退いてくれたが、倒せていないのは明らかだった。

「……」

少女は鞆に忍ばせた魔法の杖を思い出す。これからは持ち歩かないと、いけないのかもしれない。

「所持品検査とか……ないよね……」

少女はそう言ってため息をつく、家を後にした。

「自信を持って否定できないところが、大変づらいペリ」

人語を話すペリカンは、照れたのか妙に人間臭く、白い羽で黄色いくちばしをなでた。水かきのついた一方の足で、もう一方の足を掻きまでしてのける。

「瀕死ではあるペリが、まだ保健所は勘弁して欲しいペリ。それと

私の名前は――」

「もう、それ以上しゃべらないで。人がきたら、私まで変な人と思われちゃう」

花応はペリカンの言葉を、右手を挙げて制する。

人通りの少ない通りとはいえ、全くない訳ではない。

実際花応達が話しているのは、人様の民家の前なのだ。

ペリカンとしゃべる少女――。

「不思議ちゃんだわ。ご遠慮するわ。風評に乗ったらどうするのよ？」

「はい？ ペリ」

「だからペリカンが人話を話すなんて、そんな非科学なことありえないの」

「非科学ペリか？」

「非科学よ。疑似科学よ。魔法じゃあるまいし。こう見えても私は科学の――」

「魔法ペリよ。実は魔法しょ――」

――ドンッ！

という衝撃音とともに、花応とペリカンの言葉はそこで遮られる。大地が揺れた。

「何？」

「敵――ペリッ！」

衝撃音の方に首を向ける花応。

そこに――

「何、あれ？ えっ？ ゼリー？ おっきな寒天？」

そう、そこには花応が思わず呟いた感想の通り、小山のようなスライム状の物体が落ちていた。

色は半透明の青色。弾力性のある質感が、落ちた衝撃からかフルフルと震えている。

「敵ペリよ。人間を逆恨みする者の末路ペリ」

「て、敵って……」

「気をつけて下さいペリ！ 奴らは人を傷つけることなんて、何とも思っていないペリよ！」

不思議生命体を名乗るペリカンはそう言うと、花応とスライム状の物体の前に割って入った。

「あなた……そんな怪我で……私を……」

「一般人は巻き込めないペリ。今のうちに――」

――ゴォォォアアッ！

敵と呼ばれたスライムが、大きく身を震わせて全身で咆哮のような音を発した。

「――ッ！ 怖いペリ！」

ペリカンがあっさりと、花応の後ろに隠れた。

「こらっ！ 何が巻き込めないだ！ 守りなさいよ！」

「瀕死のペリカンに、守るなんて無理言わないで欲しいペリ……」
スライムの一部が、触手状に伸びて体から飛び出した。

「瀕死の割には、元気じゃない！」

「ああ、貧血がペリ……」

ペリカンはわざとらしくふらついて、花応の制服のスカートにしがみつく。

「不思議生命体なんですよ！ 何とかしなさいよ！」

「非科学ペリよ。か弱い水鳥に助けを求めるのは」

幾本かの触手が、唸りを上げて振り回された。

「あのね……」

――ヒュン……

と風切る音がして、後ろを振り向きかけた花応の顔の横を、何かが通り過ぎた。

「えっ？」

花応が目を見張る。

自分の顔の横を横切った触手は、その足下の側溝の蓋に叩きつけ

られている。

舞い上がる土ぼこりに、コンクリート片。コンクリートの蓋が粉々に砕け散っていた。

触手は元の位置に戻され、再び唸りを上げて振り回されている。

「ちよっ……ちよっと!」

「ににに、逃げるペリよ!」

ペリカンの花応のスカートをがっしりと掴んで離さない。

「離さないよ! 逃げられないでしょ!」

「見捨てないで欲しいペリ!」

「こ、この……」

敵はにじり寄るように、体を震わす。軟体動物のぜん動のように、体を震わせながら前に進む。

「え……何……」

「あわわ……ペリ……」

花応とペリカンはゆっくりと、後ろに足を運ぶ。相手を刺激しないように、ゆっくりと後ろに進む。

だがよく確かめずに後ずさったせいか、そのすぐ後ろの何かにぶつかってしまう。

「あっ?」

「電柱ペリよ」

そう、すぐ後ろは電柱だった。そして横はブロック塀。

花応達は自ら、逃げ場のない角に追いつめられてしまった。

その時――

――コッン……

と何か固いものが、そのブロック塀にあたった。

それは花応のカバンの中の――何かだった。

一、科学の娘3

少女は鞆に忍ばせた魔法の杖を握りしめた。悪い予感が、少女の背中を這い上がったからだ。

撫で上げられたような怖気だ。身震いとともに、寒気が一気に全身に伝わる。

「敵——」

そう、これは敵の気配。少女が肌で感じる敵の存在。

近くで、そう遠く離れていないところで、その気配がする。昨日取り逃がした敵だろう。

「どうして……」

だが分からない。どうして自分のところに現れないのかが分からない。

敵の気配がする。だがどこかそれは遠い。自分に挑みかかってくる気がしない。

だとすれば——

「誰か……他の人が襲われているの……」

それはあってはならないことだ。

「あなた達の敵は——私よ！」

少女は敵の気配のする方へ駆け出す。それは自身の通学路とは、一筋外れた寂しい道だった。

ブロック塀にあたったガラスの感触。鞆越しにその感触が花応に伝わる。

「逃げるわよ……」

「下手に動くと襲ってくるペリ……」

敵は力を溜めるかのように、一度止まってその場で身を激しく震わす。

「任せなさい……」

花応はそう言うと、勢いよく鞆に手を突っ込んだ。

軽くまさぐり取り出したのは、先ほど握りしめたガラスの小ビンだ。

「なめないでね……私は――」

花応はそう言うと、ガラスの蓋を外す。即座に広がる鼻をつく臭い。

だが花応はその臭いに不快な顔どころか、会心の笑みを浮かべる。

「私は科学の娘よ!」

「臭いペリ……」

「臭いのは当たり前。これは灯油よ」

笑みのまま、花応が応える。その顔は何故か自信に満ち溢れていた。

ガラスの小瓶の中で粘液質の液体が揺れていた。その揺らめく油の更には、なにやら鈍い光を放つ金属質な物体が浮かんでいる。そう、それは金属質な光を放っているが、それでいて何処か柔らかい。まるで粘土でできた金属だ。

その金属が灯油の中に浮かんでいる。

「灯油……油ペリか……燃やすペリか……」

敵は触手を振り上げた。

「違うわ……」

そう言うと花応は小ビンを傾け、その灯油をアスファルトの上に捨ててしまう。

「――ッ! 何してるペリか! 捨てちゃ――」

「灯油は捨てないとダメなの!」

「何故ペリか? 武器に――」

「武器はこっちよ! さあ、逃げなさい!」

花応はそう叫ぶとペリカンを押し退け、小ビンをふるう。小ビンの中に残っていた、鈍い銀色を放つ物質が宙を舞う。

敵の触手が唸りを上げて、花応の頭上に振り下ろされた。

その攻撃が花応達を襲う瞬間――

「食らいなさい！ 水とは混ぜてはいけない！」

花応の自慢の――そして自信に彩られたつり目が、相手の攻撃を見据える。自分の放った物質が、狙い通りに割られた側溝の中に消える瞬間――花応は叫んだ。

「アルカリ金属！」

一、科学の娘4

少女は敵を見つけた。やはり誰かが襲われている。駆ける足を速める。魔法の杖を鞘から抜き放った。

スライムの半透明の体越しに、ぼんやりと少女の姿が見える。

制服！

襲われている少女は制服を着ているように見えた。スライム越しではよく分らない。

ましてや全力で駆ける少女の揺れる視界では、大雑把にしか把握できない。

うちの学校の生徒――

少女はそのことにまず気づいた。

襲われている少女が着ている制服。それは今少女が着ているのと同じ制服だった。

そしてそのすぐ後ろには、先端にいく程細長い花瓶状の白い物体がいる。

何？ 敵なの？ 二体も――

もはや一刻の猶予もない事態と見た少女は、魔法の杖に魔力を送る。

柄が甲高い金属を鳴らし、昨晚よりは力強い光が先端の宝石に灯る。

「食らいなさい！」

少女が魔力を炎に変え、敵に叩きつけようとしたその時――自身に満ち溢れた少女の声がした。

「アルカリ金属！」

花応のその叫び声とともに、側溝が爆発した。

同時に大量の水しぶきが立ち上がる。

——ゴォォアアッ！

敵が驚きの怒号とも、怒りの咆哮ともとれる雄叫びを上げた。

「逃げるわよ！」

花応はすかさず身を翻してそう叫ぶと、ペリカンを脇に抱えるように走った。

後ろでは爆音を上げて、いまだに大量の水しぶきが上がっている。

「何ペリか？ 水柱が上がったペリよ！」

抱えられながら自らも空中で無駄に足を漕ぎ、ペリカンは背後と花応の顔を交互に見やる。

だが吹き上がった水しぶきで、その向こうの敵は見えない。

「アルカリ金属よ。アルカリ金属は水と激しく反応するの」

「水？ 反応？ 爆発してるペリよ！ 魔法ペリか？」

「違うわ——」

花応は角を曲がる。目指すは大通りにつながる公園だ。

「科学よ！」

花応は公園に飛び込んで振り返り、誇りと自信に満ち溢れた顔で言い放った。

「何なの……」

少女はずぶぬれになりながら呟いた。敵はまたもや逃してしまった。

残されたのは水浸しの制服を着て、路地に残されたこの少女一人。

「何なのよ……今の……」

少女はもう一度呟いた。

「……」

「……」

花応とペリカンは黙って今きた道を見つめる。公園に飛び込み、一通り二人して息を整えた。

敵と呼ばれたモノの追ってくる気配はしない。

「追ってこないペリ……」

「だといいんだけど……」

公園から恐る恐る道をのぞいた花応は、左右も見回してから言った。

「逃げたペリか……」

「そう思いたいけど……」

花応はため息まじりにそう呟くと、近くのベンチに腰を下ろす。その横でペリカンが同じく腰を下ろした。足を前に投げ出す、人間臭い座り方だ。

「……」

「何ペリか？」

「別に……今更座り方一つで驚いたりしないけど――」

花応はベンチで息を整える。

「ホント非科学ね」

「不思議ペリか？　不思議生命体冥利に尽きるペリ」

「不思議よ。不思議。大いに不思議だわ。私はね、科学的じゃないのは嫌いな。オカルトとか。超常現象とか。信じないタイプなの」

「……ペリ。オカルトでも、超常現象でもないペリ。魔法ペリ」

ペリカンはベンチで胸を張って言う。

「一緒よ。非科学よ。ペリカンのなりして人語を話さないでくれる。科学的でないわ」

「でも、現に目の前で話してるペリよ。それに曲がりなりにも、危険を共にした仲ペリ。名前ぐらい訊くのが礼儀ペリよ」

「ぐ……生意気ね……」

「人の意見が生意気に聞こえるのは、相手を下に見ている証拠ペリ。」

そして正論を言われている証拠ペリよ」

「フンッ！　じゃ、名前は？　てか、何者よあなた？」

「名前はジョー。不思議生命体のジョーペリ」

「不思議生命体？　ジョー？　ペリカン・ジョー？」

「ペリカンではないペリよ」

袋の垂れ下がった黄色いくちばしを向けて、ジョーと名乗った水鳥は花応に伝える。

「ペリカンよ。どのくちばし下げて、ペリカンじゃないとか言うのよ」

「ペリ……」

「まあ、いいわ。ペリ環状反応に名前が似てるから、特別に許してあげる」

「ペ……ペリ？　ペリカンジョーハンノー？」

「周辺環状反応とも言うわ。五つ種類があるんだけど、 π 電子系の——」

「ペリ……わ、分からないペリ。あっ、お名前は？　聞いてなかったペリ」

「私？　私は桐山花応。化学反応の『化』に草冠の『花』と、化学反応の『応』で花応」

花応はカバンから絆創膏を取り出した。

箱ごと取り出したそれには、『桐山メデイカル』と印字されている。

「ペリ」

「ペリって……漢字分かるの？」

花応はジョーの羽をかき分け、血が出ていると思しきところに絆創膏を貼ってやった。

だが羽が邪魔をしてうまくいかない。花応は数を頼りに傷口の周りに、ひたすら絆創膏をあてがう。

「少しは分かるペリ。不思議生命体の世界では、日本語が分からないと友達の話題についていけないペリ」

花応に身を任せながら、ジョーが自慢げに答える。

「何だよ？」

「人間界から漏れ出てくる電波。それを拾って見るのが、サブカルチャーの代名詞になっているペリ。一番人気は日本の深夜放送ペリ」

「あつ、そ……」

「ところでさっきのは科学ペリか？」

ジョーが嬉しげに右の羽を上げた。せっかく貼った絆創膏が、その動きで何枚かはがれてしまった。

「そうよ。水と激しく反応するのよ、アルカリ金属は。見ての通り爆発的にね。だから普段は灯油に入れて保存するの。モノが何かまでは詳しく聞かないでね。怒られるから」

「ペリ……何故ペリか……」

「持ち運ぶようなものじゃ——ないからよ……いくら科学の娘でもね……」

花応は真剣そのものの口調で呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5729y/>

桐山花応（きりやまかのん）の科学的魔法

2011年12月1日18時47分発行